
大学生の防災意識についての調査研究 (河田恵昭ほか、災害情報 2004-2, 115-119)

2013年6月21日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

[概要]

日本は火山地帯に属するため、地震、火山噴火、台風、津波など様々な自然災害が発生している。災害の発生する際に避難や救援活動が迅速かつ円滑的に行われるため、平常時からの防災意識や知識を備えることが非常に重要である。特に大学生などの若い人達が救援ボランティアの中心となるので、本論文では、大学生の防災意識、災害に備える行動の形態などについて調査を行った。

[結果]

- (1) 大学生の防災意識：懐中電灯、ラジオ、飲料水、風呂水、保存食、救急袋、非常袋、家具の固定、避難所の認知、家族との緊急時の集合場所の検討の有無の10項目に対し、大学生の災害の備えは一般市民の全国平均に比べて低い傾向にある。
- (2) 住居形態と防災意識の関係：下宿生の半分以上は10項目の備えを行っていない。避難所に関して、場所を全く知らないと回答した自宅学生は26%に対し下宿学生は49.2%。場所をよく知っているとして回答した自宅生が15.8%であるのに対して下宿生は5.8%と極端に低い。
- (3) 被災経験の有無と防災意識の関係：被災経験のある学生は避難場所の認知度、待ち合わせ場所の確認、避難訓練の参加意識に被災経験のない学生より高いが、日常生活の中での継続的な備えについてはほとんど手つかずの状態である。
- (4) 地域、性別、災害発生可能性の認識と防災意識との関係：災害が起こる可能性とそれに対する恐怖感が東海地方の学生が関西、関東地方の学生より高く、性別から見ると、男性に比べ女性のほうが高い傾向が見られる。全く何も備えを行っていない数は男性と比べ女性が少ないものの、約4割りの女学生は災害への備えは行っていない。
- (5) 大学生の災害時ボランティアに対する意識：災害発生時にボランティア活動に参加したいと回答した大学生が74.5%であり、全国的な一般市民レベルとほぼ同じであった。ボランティアに参加する際に障害になるものに対しては時間の制約や活動の方法がわからないなど国のボランティア全般に言えることと大学の授業である大学生の特徴的な要因が挙げられた。

[まとめと今後の課題]

今回の調査結果は大学生の災害への備えは低い傾向にあることが示された。下宿学生が防災意識の薄いことは災害情報を受け取る環境にないことが考えられる。大学当局もほとんどの大学で防災訓練や防災への体型的な提供は行われていないのが現状である。

今後の課題としては大学生に対して継続的に防災情報や知識をどのように受け取らせるか、また、大学生の災害時ボランティアとしての人の資源について、潜在的な高さをどのように生かしていくかが問われることである。

[考察]

本論文では災害時のボランティア活動の中心となる大学生の防災意識や活動形態について調査を行った。大学生は防災意識が低下していることがわかった。今後防災意識を向上させ、防災教育を普及させることがとても必要と思われる。

大学では一定レベルの防災知識を備えた学生を養成して社会に作り出すことが望まれている。